



おば人



宇野千代著
木村莊八畫

中央公論社



おはん奥附

©一九七八

昭和三十二年六月五 日初版

昭和五十三年四月十五日十版

著者宇野千代装釘插畫者木村莊八

發行者高梨茂印刷者北島義俊製版

印刷所大日本印刷株式會社東京都

新宿區市谷加賀町一ノ十二發行所

中央公論社東京都中央區京橋二丁

目八番七號振替東京二一三十四番

定價千三百五十圓

光文社文庫

長編推理小説

穂高殺人ケルン

あずさ りん た ろう
梓 林 太 郎

光 文 社

一

『よう訊きいてくださりました。私はもと、河原町かはらまちの加納屋かなやと申す紺屋くろやの忤せがれでござります。生れた家はとうの昔に逼迫ひつそくしてしまひ、いまではこのやうな人の家の軒のきさき借りて小商こあきなひの古手屋ふるてや、もう何の屈托くつたくもない身の上でござりますのに、何を好んでいらぬ苦勞するかとおもひますと、わが身の阿呆あほうがをかしうてなりませぬ。

へい、あの女をんどは、實は私の女房にようばうではござりませぬ。いまから七年ほど前に、生れてはじめて馴染なじみました町の藝者げいこでござります。私より

一つ齡上としうへの卅三、名前はおかよと申します。あなたさまもご存じの、半月庵はんげつあんの抱へであつたのでござりますが、いまでは自分で鍛冶屋町かぢやちやうの裏手に細い家持こつまつて、ほんの一人か二人の女衆をんどしをおいたりして、藝げい者屋にやをいたしてをります。私はその女の家をたごに寝とまりして、ここへは晝食ひるの辨當ひるもつて通うてゐるのでござります。

古手屋とは名なばかり、お客さま相手に茶をたてたり、すきな花を生いけたりしてますのでござりますが、收入みいりというたら、わが身ひとりの小遣錢こづかいせんにも事かかんならんやうな、まア言うたら女をたごに食はしてもろうてる、しがない男でござります。

あれは去年の夏、盆ぼんも間近かの或る晩のこととでござりました。

町の寄合ひのくづれで、よそのお人と二三人あぐわりのうへの臥龍橋ふりやうばしの橋の上でええ心持になつて風にふかれてゐてたのでござります。すると誰やら、



白い浴衣ゆふたきた女をんながすうっと私のすぐ傍わきをすりよって通るのでござります。この廣い橋の上をあなに近うに人の傍わきを通らいでもと、さう思うて顔みますと、別れた女房のおはんでござります。思はずあと追ひさうになりながら、お人の手前もござりますすけに、わざとに間まおいて急いで警察の横手までいきますと、あとから私の來るのが分つたのでござりませう、くらい板塀のところまで待つてをりました。「おはんか。かはりないか。久しいかつたなア」と私は申しました。

あのあたりはちようど藪やぶ堤つみの蔭になつてをりますので、晝でも淋しいやうなところでござります。川風が絶え間なしにさあアと藪の上をふきぬけてきましてなア、そのたんびに川向うの糸くり工場から女衆をんなごしのうたうてる唄が手にとるやうに聞えてくるのでござります。

おはんは白い浴衣きて、見覺えのある手織ており縞じまの帶をしめてをりました。

た。どこというて男の心ひくやうな女ではござりませねど、いつでも髪^{かみ}の毛のねっとりと汗かいてゐますやうな、顔^{かほ}の肌理^{きり}の細^こいのが取柄^{てがら}でござりましたが、その板塀^{いたへい}にはりつくやうな恰好^{かつちやう}して横^{よこ}むいてゐるのでござります。「何やて？　子供もたっしゃやて？」と私はたたみかけて申しました。「へえ、この春から、もう學校へ行きよります。」やっと口の中で申すのでござります。「いつやらお前^{まへ}にあひに行^いて、そや、子供の顔^{かほ}も見たいと思うたのやつたけれど、劍^{けん}もほろろにお母^かはんに突きだされた。それゝ俺^{おれ}の方が、何ぼら蟲^{むし}のええこと考へとるかわからんけど。」と、やくだいもないことをぼそぼそというてます中に、もう戀^{こひ}しうてならん女^{をんな}と無理無體^{むりむたい}に仲^なせかれてでもをりますやうな、をかしげな心持^{こころもち}になつたのでござります。

この女房のおはんとは、七年前あのおかよのことがもとで別れたの

でござります。私は女をんなの家へ行いてしまひ、おはんは新門前しんもんぜんの親の家へ引きとられ、それはかういふ狭せままい町の中のこととござりますすけに、あはうと思へば何ほでもあひさうなものでござりますのに、もう久しいこと出あひもせなんだのでござります。

へい、おはんが子供を生みましたのは親の家へ往いてからでござります。男の子で、名前は悟さとると申します。ほんに小説みたよな話でござりますが、二人いっしょにをります中は、もうながい間子供がほしいほしいというてまして、お大師さまに願ぐわんかけたり、易者えきしやに見てもろうたりしてたのでござります。それでいよいよ別れんならんといふときになつて、氣がついてみたら子供が宿つてゐたのでござります。

ほんに一しよにゐてます中におぎゃアと生れてをりましたら、私も迷ひはせなんだやろと思ふのでござりますが、そんでゐて、かういふ

ときの男の心いうたら、畜生みたやうなものでござりますわなア。七年ぶりにあつた女房の口から、現在血をわけたわが子が學校へいきよるときかされました、へえ、さうか、知らん間に大きうなりよつたなア、とは思ひましたれど、それでどうぞかうぞしてやりたいとは夢にも思はなんだのでござります。

子供のことよりも何よりも、私にはいまその眼の前にたつてゐるおはんの心の中が氣にかかつてなりませぬ。それアもう、ほかに女をこしらへて、罪咎つみとがもない女房を塵芥ちりあくたのやうにすててしまつたのでござりますけに、おはんのお袋さまには勿論もちろんのこと、世間のお人にどう思はれてをりませうとも不足には思ひませぬ。それアもう、覺悟の上でござりますけれど、ただ、いまそこにゐてます女房のおはんには、どうでも悪うは思はれともない。あの男はいまよその女をんなと一しよにゐ

てるけど、そりゃ、よんどしようむないことがあつてのことやる。しんから薄情はくじやうな心があつてのことではないやろ、とさう思うててもらひたいのでござります。

「なア、あのな、大名小路だいみやうこうぢの角に吉田屋て花屋があつたやろ、あそこの店かりて商賣しょうばいしてるのや。朝早うはをらんけど、晝すぎやったら、たいがい往いてる。裏のおばはんにもよう話しておくけに、一ぺんあひに來てんか、」とあとさきの考へもなう、いうてしまふたのでござります。

それやもう、そのやうなこというて女をなこの氣をひいたり、早ういうたら、もう一ぺんおはんと燃ももどして、もとの夫婦になりたいと思ふたりしてたのではござりませぬ。ただその一ときの間でも、おはんの心をしづめたい、恨うらまれてゐともない、とさう思うてゐたままでのこと



たしと

曲るの
手廻りのかへ

見えやうに

あつてこ
うまが

あ

ござります。

ほんに人の心ほど淺墓あさはかなものはござりませぬ。いうたらほんのその場きりの、阿呆あほうなてんごうでござりますのに、「分わつたな、」と私はおはんの肩を押すやうにして低い聲して申しました。「誰やら向うからきよる。早う行いき、」と申しますと、おはんははじめて顔あげて何やらものいひたさうな眼をしてちらつと私をみましたが、それなり、あとも見んと馳かけていてしまふたのでござります。

そのおはんの白い浴衣きた後姿うしろすがたが藪堤やぶつちの一本道をずうつと向うの方へだんだんと小さうなつて、たうとう曲尺町きさしめぢやうの露路ろうぢの方へ見えんやうになつていてしまふまで、私はそこにたつてゐたのでござります。

あと追ひかけていか、いやいかんと、とその間中あひだぢゆう、迷うてゐたのでござりますが、まアいうたら私の、これが心の迷ひのはじまりで

ござりました。

二

それからしばらくの間、私は何となうおはんのあひにくるのを心待ちにしてゐたのでござります。夏の祇園祭ぎんまつりもすんで、秋の恵比壽えびすさまも間近いと言ひますのに、おはんのやつてきさうな氣配けいはござりませぬ。私は相かはらず大名小路の出店でみせへ通うてゐたのでござりますが、晩方、店の暖簾のれんをおろして、さて一服と煙草をすひながら往來の人通りをぼんやりと眺めてますと、わが身の上の安穩あんのんなのが、なにやら不思議に思はれるのでござります。「おばはん、ではお願い申しますで、」というて、いつものやうに裏手の家へ聲をかけ店の鍵を預けると、それはそはとわが家へもどるのでござりますが、ちょうど日の暮れ方で、鍛冶屋町のあたりは一日の中で一ばん活氣のあるときでござります。